「神」の多義性と神道の包括的世界観: 神道の神々とキリスト教の神

POLYSEMOUSE MEANINGS OF KAMI AND SHINTO'S INCLUSIVE PERSPECTIVE: SHINTO'S GODS AND CHRISTIANITY GOD

丸山秀夫[1]

Maruyama Hideo[1]

序論

日本語ではキリスト教の「ゴッド」は神と訳される。しかし神ということばは本来は神道の神を意味していた。したがって現代では「神」ということばには一神教の神と多神教の神という矛盾した二つの意味が共存している。なぜこのようなことが可能なのか。この一文では日本人の神道的世界観は矛盾した概念をも受け入れる包括性を持つものであるがゆえに神ということばの中に一神教の神と多神教の神が無批判に共存できるということを明らかにする。

キーワード： 神 神道　キリスト教

Abstract

Kami is interpreted from Christianity God in Japanese. However, the original meaning of Kami is gods of Shinto. Thus Kami has at least two meanings in it: monotheistic God and polytheism gods of Shinto. Contradictory ideas are included in one word Kami. It is unusual translation. In this article it will be clarified that Japanese inclusive perspective based on Shinto allows this ambiguous and polysemouse translation and this Shinto perspective allows people to accept this translation without criticism.

Keywords: God, Shinto, Christianity

[1] 教授、教養学部ビジネス日本語学科、パンヤーピワット経営大学
Lecturer, Faculty of Liberal Arts, Panyapiwat Institute of Management, E-mail: maruyama_hideo@yahoo.co.jp

ผ่านการรับรองคุณภาพจาก TCI (กลุ่มที่ 1) สาขามนุษยศาสตร์และสังคมศาสตร์

はじめに

日本語の「神」ということばは「キリスト教の神」と「神道の神」の二つの矛盾した意味を含んでいる。しかし、キリスト教が日本で今のように定着する前は神といえば神道の神であったはずであるが現在では神ということばの中に多神教の神と一神教の神が同居しているのである。さらにその矛盾を矛盾とも思わない。本論では、なぜ日本ではそのようなことが可能なのかを明らかにすることが目的である。

そのために本論では本居宣長の『古事記伝』と柳父章の『「ゴッド」は神か上帝か』、そして、丸山真男の『日本の思想』で論じられている『無限抱擁』という概念を援用した。本居の神の定義は『古事記伝』に見られる。これは江戸時代のものであるが現代においても権威をもつ定義とさている。次に柳父の著書には神がキリスト教のゴッドの訳語として採用された経緯が詳しく書かれているが本論においてはその訳語がどのように定着したかという観点から論じた。そして、丸山真男の『日本の思想』で論じられている『無限抱擁』という概念を日本人の神道的世界観の包括性と結びつけて論じた。

本論は先ず、神道はどのようなものであるかを歴史を追ってみていく。次にキリスト教のゴッドがどのような経過を経て神と訳されたかを見ていく。最後に結論として一神教の神が神として日本文化に定着することができたのは日本人の神道的包括的世界観があるがゆえだということを検証する。

なお、この一文はSaengtham College Journal誌に掲載予定の英文の拙論 The Historical Change of Kamiを元にし、なおかつそこに新たな視点を加えて日本語に書き改めたものであることをお断りしておく。

本文

1. 神道の包括的世界観

1.1 神道とは

1.1.1 神道の分類

神道はいくつかに分類される。分類の仕方にもよるが、皇室神道、神社神道、民俗神道が代表的な分類である。皇室神道は宮中祭祀として現代でも宮中で行われている。神社神道は日本国内に多く存在する神社とその氏子、崇敬者などによる組織によって行われる信仰形態である。このほかにも、身近なものとして民俗神道がある。神社の信仰形態とは別に庶民の間で行われてきた信仰行事がこれに当たる。民俗神道は仏教、道教と習合しているものが多い。例えば路傍の神として石像の形で祀られる道祖神や、主に農民に信仰されている田の神、山の神などである。

ほかにも教派神道、復古神道そして国家神道などと分類される。教派神道は教祖を持つなどの点において他の神道とは異なる。復古神道は江戸時代に起きた思想で本居宣長、平田篤胤などの国学者が中心となり、日本民族固有の神道精神に立ち返ろうという思想である。明治時代には天皇を神とした国家神道があった。

1.1.2 神道の変遷

(1) 縄文時代から弥生時代にかけて

三橋によれば、神道は古代から現代に続く日本の土着宗教であり、自然発生的宗教である。日本の歴史が始まって以来、脈々と日本人の生活の中に息づいてきた日本人の民族的霊性、世界観であり、生活と切り離すことができないほどに深く日本人の心と生活に根ざ

している日本の風土から生まれた日本固有の民族宗教である（三橋，2010：10)。神道は日常生活であり、日常生活の中に霊性を見出すのが神道である。しかし神道の歴史は古く、神道と呼ばれる以前の縄文時代を原点に持つ。そして仏教の伝来以降に神道と呼ばれるようになった。

縄文時代、人々は狩猟をして自然に包まれ、自然と共に暮らしていた。縄文時代の人々の世界観は自然の中に霊が宿っていると考える自然信仰、精霊信仰である。動物や植物その他生命のないもの、たとえば岩や滝にまでも神や神聖なものの存在を認める信仰形態である。本居の神の定義においても「鳥獣木草のたぐひ、海山など、其の余何にまれ尋常ならず優れたる徳のありて、可畏き物を神とは云えるなり」(本居，1996：172)と記されている。これはまさに縄文以来の八百万の神という自然のすべてのものに神が宿っているという精霊信仰である。上田は神道を、あらゆるものに霊性聖性を見出し敬うものであるとしている（上田，2000：37)。上田が述べているように、人々があらゆるところ、あらゆるものに霊性を見出し、それを敬うというのは神道が培ってきた日本人の典型的な世界観であり、宗教的態度である。

神道は稲作と関係が深い（三橋，2010：13)。弥生時代に入って人々の生活は大きく変わった。縄文時代の自然信仰も変わった。自然信仰に弥生時代の新しい世界観が組み込まれていったのである。それは弥生時代に入って大陸からの稲作文化と共にもたらされた。さらに、帰化人によって「神道」ということばがもたらされ、神ということばの意味も少しずつ変わってきた。

稲作は縄文時代の終わり頃から日本に移入され、弥生時代に入り広く行われるようになった。稲作において自然は生死を分ける重要なものである。稲作は本来暖かい地方で行われていたものである。日本は比較的自然が豊かで穏やかである。人々は自然の中で自然に包まれて暮らしていた。それでも、大雨、洪水、旱魃、台風などの自然災害は免れない。このような自然条件の中にあって稲作を行ってきた人々は自然災害を鎮めようとし、自然を崇め、豊作を祈り、自然現象にも神を見出し畏怖、畏敬の対象としてきた。

稲作において田畑は命である。田畑は代々の祖先から受け継がれたものである。今、稲作ができるのは祖先あってのことである。人々はこの田畑を守っていかなければならない。人々は祖先に対しても崇拝の念を持つようになる。祖先崇拝はこのような思いから生まれたのである。祖先崇拝は儒教的な世界観を持った信仰形態であるが、宮田によれば、民俗神道では死者や祖先の霊は山にあって時代を経てその霊は神になるのである(宮田，1985：613-616)。そして山の上から人々を守り、また田植えの頃になると山の神が下りてきて田の神になって農作を守るのである。これが神道的な祖先崇拝である。神道では霊は生ける人間と共にあり生ける人間を艱難辛苦から守ると考えられている。これも神道における神概念である。

自然、あるいは自然現象においても神が見出される。本居によれば「人間の知の及ばざるものが神」である（倉野，1940：172-174)。神は自然であり自然現象である。自然と自然現象は人間にとってなすすべもないものである。人々は豊かな自然の中に神を見出し敬い祀り平和と繁殖を願った。人々は自然現象

にも神を見出し、畏怖の念を持っていた。この基本的な神道の態度と概念は神道が生まれて以来、今日までの日本人の世界観の基礎を作ってきた。

(2) 神道という呼び方

稲作と共に文字、信仰などの文化も入ってきた。帰化人は稲作だけでなく自分たちが中国で行っていた信仰をも持ってきた。それは道教的なものである。そしてその儀式を日本でも行っていた。それを日本の人々が取り入れたのである。魏志倭人伝の著者、陳寿は卑弥呼が行っていた儀式を神道と呼んでいる。下出によれば、神道は道教、道教的なものシャーマニズム的なものを含んだ名称として中国語で使われており日本で行われていた儀式は中国の意味での神道だったのである(下出,1979:3)。

ここで神道という名称が問題になる。古来の日本では自分たちの宗教観、世界観が神道であるという意識はなかった。「神道」という言葉が中国で最初に現れたのは「易経」で「霊の道」という意味で使われている(三橋, 2010: 16)。一方、日本で最初に「神道」という語が現れたのは日本書紀においてである (下出, 1979: 3)。それまでは自分たちの信仰に名前をつける必要はなかった。

異質なものとの出会い、つまり５３８年の中国からの仏教との出会いにおいて自分たちの信仰が意識され、仏教とは違うものであるという意識をもち、「神道」ということばを中国語から取り入れて自分たちの世界観に名前をつけたのである。この時点で神道は自然崇拝とともに道教の現世利益的な信仰を取り入れ自然崇拝と道教的世界観が習合され、自然崇拝が人間をも含む形になったのである。天の神と地の神を信仰する、いわゆる神祇信仰の形態になった。

1.2 神の変遷

1.2.1 和語としてのカミと漢字で書かれた神

さらに神ということばも問題になる。古来日本には文字がなかった。漢字の移入は４世紀から６世紀にかけての古墳時代から始まった。この時代には中国との往来があり貿易や国交の書類作成言語として中国語が使われていた。５世紀から６世紀の出土品には漢字が刻み付けられている。つまり、話し言葉は日本語であったが、書き言葉は中国語であった。しかし、中国語で書き表しきれないのは日本の人名、地名などである。これを表すために漢字の音のみを使って日本語を表していた。これが万葉仮名と呼ばれるものの起こりである。奈良時代、平安時代には中国語の文字から日本語の文字が作られた。

では、「カミ」ということばがどのように「神」になったかを見てみる。文字出現以前から「カミ」ということばは音としてあった。奈良時代から平安時代にかけて漢字がもたらされその漢字音を使ってカミを書き表していた。「カミ」は「迦微」など、いくつかの漢字が当てられた (林, 2000: 10)。これは音を表すだけで意味を表さない。中国語では「神」という漢字は「Shen」と発音されその意味は「霊魂」など人間、死者の目に見えない力を意味していた。これは日本語のカミが自然の中に見出される精霊を意味することを考えると「神」を「カミ」と読むことで「神」の中に中国語の「Shen」の意味つまり「人間の霊魂」と日本語の「カミ」つまり「自然崇拝の精霊」の二つの意味がこめられることになる。現代の日本語に

おいても「神」は訓読みで「カミ」であるが、音読みで「シン」である。しかしこの二つが別の意味であることは日常意識されることはない。

死者の霊魂を神として祀るようになり、「カミ」が「神」書き表わされることで神の意味がさらに広がる。奈良時代に書かれた記紀神話は神話を通して天皇が神であることの正統性が語られ、天皇が神として権威付けられた。しかし神道の神は善いもののみならずあらぶる神をも神として祀る。これが後の御霊信仰になった。その代表的な例は菅原道真の怨念を鎮めるために神として祀ったものである。また、民俗神道では「死神」、「疫病神」、「貧乏神」、さらに日常生活の中で、「厠神」「竈神」などさまざまなものが神として祀られる。このように神ということばの中に多くの意味が込められることになった。

本居によれば「尋常ならざる力を持つもの」が神である。神の概念は人間、動物、植物、そして海、山などが含まれる。つまりどんなものであれ、尋常なものではなく、人間に畏怖の念を抱かせるようなものはすべて神である。尋常でないというものには善のみならず悪さえも含まれる（倉野，1940：172-174）。日本の神は天地の神々をはじめとして、神々を祭る神社の霊も神である。鳥や獣、草木や海山も「すぐれたも　の」、「かしこく尊いもの」は神として崇められる。尋常ならざる力を持つ人もまた神として祀られる。これは神道の包括的世界観である。天皇の祖先は天照大神とされ、神として崇められる。天皇だけでなく普通の人間であっても偉大な業績を持ち権威を持つ人間もやはり神と崇められる。悪霊であってもたたりを恐れて神として祀り怒りを静める。逆に言えば祀られたものはすべて神になる。これは八百万の神である。

生前の尋常ならざる働きによって死後、神として祀られている神社は数多い。例えば豊臣秀吉を祀った豊国神社、徳川家康を祀った東照宮などである。その後の１９世紀から二十世紀にかけて多くの歴史上の人物を神として祀った神社が建てられた。明治神宮は明治天皇を祀った神社である。そして戦後には明治以降の日本の内外の戦争において戦没した軍人らが英霊として靖国神社に祀られている。

このように神の概念というのは縄文時代の自然崇拝から始まり人間をも神とする包括的世界観に変遷してきた。その発展には漢字が多大の影響を与えた。つまり、神が漢字で神と書かれることによって無意識に中国の神と神道の神が包括的に習合したのである。

1.2.2 ゴッドから神への変容

キリスト教のゴッドは超越する絶対者に対するものであるのに対し、神道は生活そのものが神道であり対立する意識がない。この意味でヨーロッパ語における一神教の宗教という概念とはまったく異なる。キリスト教が聖と俗を分けるのに対し神道では生活の中にすべてが抱合されるのである。すべてが調和をもって抱合されるということが日本人の世界観である。超越する神ではなく、生活のあらゆる場所、あらゆるものに霊性を見出し神として祀る。神道はこのように現世的な霊性と包括性を持つ生活態度であり、神道がこのように変容したのは、神道の持つ八百万の神という世界観があればこそこのことであり、神道という世界観の包括性のなせる業である。

キリスト教のゴッドが神に訳された経緯は偶然である。公式には日本にキリスト教が伝来したのは16世紀とされている。フランシスコザビエル（1506－1552）が日本に来て伝道を始めたのは1549年である。伝道において彼はキリスト教の「ゴッド」を「大日」と訳してそれを使っていた。当時日本語には神ということばがあった。イエズス会が作った日葡辞書（1603）には「シントウ」ということばの説明として「カミの道」としている（三橋，2010：17）。したがってザビエルはそのことばを採用しなかった。しかし、「大日」ということばもすぐに使うことをやめ、その後は「デウス」「ゼウス」ということばを使って伝道していた。中国では1582年にマテオリッチが中国に渡り宣教を開始した。彼はキリスト教のゴッドを中国語で「天主」(tienzu)と訳した。また同時に「上帝」という言葉も使われていた。その後日本においても中国においてもキリスト教の伝道は衰退していく。

19世紀に入りロバートモリソン（1782-1834）がプロテスタントの宣教師として初めて広東に到着した。彼はロンドン伝道会から中国へ派遣された宣教師である。彼は聖書を中国語に訳し1823年に出版した。これは世界で最初に中国語に訳された聖書である。そのときに問題となったのが「ゴッド」をどのように中国語に訳すかであった。中国語には適当な訳語がなかったからである。彼は「ゴッド」をスピリットの意味を持つ「神」と訳した。また、時には「神天」ということばに訳したりもした。栗山によればその当時中国語ではゴッドを表すためにいくつかの言葉が使われていたらしい。前述の語のほかに「上帝」、「天帝」などである（栗山，2000）。

1847年に聖書改訳委員会が開かれた。ここでゴッドの訳語が問題になる。問題となったのは「上帝」と訳すか「神」と訳すかである。「上帝」訳を主張したのはメドハーストをはじめとするイギリス人宣教師である。一方ブリッジマンをはじめとするアメリカ人宣教師はモリソンと同じ「神」訳を主張した。しかし、この会議では結局折り合いがつかず1852年に「上帝」訳聖書が、そして1859年には「神」訳聖書の二つが発行された。中国語にはゴッドの概念がなく、したがってそれをあらわす語もないところからこのような論争が起きた。

日本における聖書訳は以前からあった。1837年に訳したのはドイツ人宣教師ギュツラフである。彼は以前中国でメドハーストらとともに宣教していた。したがって本来であれば当然中国語訳の「上帝」をゴッドに当てると思われるが、彼は「神」を当てた。それは日本人の音吉の協力があったからだと思われる。音吉は漁師であり当時の儒教の知識はあまりなかった。その音吉がゴッド理解の後に選んだのが「神」だった。音吉の語選択はおそらく当時の日本人一般の理解であり、その理解は日本の伝統的な神理解に基づいてのことである。

さらに日本が1857年に開国して最初に来た宣教師は1859年に来たヘボンであった。ヘボンはアメリカ人であった。したがって彼は上記の「神」訳聖書を携えて来日した。日本にも「神」ということばがあり、同じ漢字を使う民族であったため人々は無批判に「神」訳の聖書を受け入れ、最初の日本語訳聖書である明治元訳を作成するときもこの中国語聖書の「神」が無批判に採用された。中国語の神と日本語のカミは全く同じではない。しかし同じ漢字を使うということでアメリカ人宣教師たちにとって

も翻訳の問題とならなかった（柳父，2001：121-3）。この時点において中国の「Shen」が「神」と置き換えられ、それを「カミ」と発音することで中国の「神」と日本の「カミ」がこのことばの中に共存することになったのである。そしてさらに、「神」の訳語はカトリックで使われていた「天主」をも駆逐して最早「ゴッド」は「神」であると認識されるにいたったのである。

2. 明治以降のキリスト教の神の定着

2.1 文明開化

明治時代には日本に西洋の文明が入ってきた。文明開化と呼ばれるこの時期には日本の近代化のために西洋の制度が取り入れられ、日本の社会が大きく変化した。さらに政府の留学生としてアメリカやヨーロッパに留学させたり、あるいは新しい学校制度にともない、多くの教師がアメリカやヨーロッパから招かれたことで西洋の制度のみならず西洋の文化までが取り入れられた。そして１８７３年にはキリスト教が解禁になった。一神教としてのキリスト教を取り入れたのというのもそのひとつである。

キリスト教を受け入れるということは明治時代においては近代化をも意味していた。ザビエルの時代もそうであったが、キリスト教は新しい知識、技術をもたらすものであった。そのためにキリスト教に近づくものも多かった。明治時代においてはキリスト教は近代化をもたらすものとして見られていた。明治時代に洗礼をうけた人々は主に知識階級の人々であった。彼らにとってキリスト教は西洋の新しい考えをもたらすものであり、キリスト教は彼らの知的欲求を満たした。ニールのことばを借りれば日本ではキリスト教徒の数は少ないがキリスト教の影響を受けたものは数知れずある（Neil, 1987：418）。事実、日本におけるキリスト信者の数は人口の一パーセント前後である。しかし、キリスト教の影響は膨大である。つまり、キリスト教はそのイデオロギーを持ち込むためのものだったのである。日本人の強い好奇心は西洋の新しい文化を取り込むために必死だったのである。そのおかげで西洋的な考え方が日本にも定着した。しかし、キリスト教の神という概念の定着のためにはクリスチャンたちの努力も重要な役割を担った。

2.2 クリスチャンたちの啓蒙運動

日本社会において神がその伝統的な意味に、新たにキリスト教の神の概念を付け加えていった。どのようにしてそれが行われたのか。それは宣教師の努力だけではない。日本社会における「神」ということばの意味の定着はクリスチャンの努力による結果である。クリスチャンの活動を通しての啓蒙というのも大きな影響を与えた。たとえばクリスチャンによる社会福祉、教育、文学である。特に社会的弱者に対する献身的な活動はクリスチャン以外の人々にも影響を与えた。彼らの活動のエネルギーとなるキリスト教とは何であろうかと思わせるにいたるのである。日本社会における「神」ということばの意味の定着はクリスチャンの努力による結果である。

クリスチャンたちの努力は二十世紀初頭から始まっている。日本の知識階級の人々は知的好奇心をもって西洋から来た新しい宗教に接した。西洋の新しい考えを知りたいという欲求からキリスト教に近づいた人も多かった。キリスト教の布教が日本で認められた当初は中国語の聖書が用いられていた。その当時の日本の知

識階級の人々は中国語を理解できる人も多かったからである。中国語の翻訳には「神」の文字が使われている。彼らもその文字を通して理解する。中国の神と日本のカミは違っていても「神」という文字で表されれば日本の意味で理解する。彼らのゴッド理解が「神」ということばを通して行われたのである。しかし、聖書のコンテキストから理解する神はもはやカミではないことは明らかである。かれらは神をカミとは別の新しい神、一神教の神として捕らえ、新たに辞書に加えていったのである。これが知識層からの「神」理解である。

賀川豊彦は大正から昭和期の社会運動家である。労働運動、農民運動、生活協同組合運動において重要な役割を担った人物である。現代の日本人が彼の運動を通して受け取った恩恵は多大である。それはクリスチャンに限らず広く一般の人々にも多大の恩恵を与えた。その恩恵はひとえに彼のクリスチャンの使命として献身的に種々の社会運動に人生をささげた賜物である。賀川のみならずほかの多くのクリスチャンの社会に対する献身的努力を通して次第に広く一般の人にもキリストの名前が知れ渡るのである。社会活動を通してだけでなく教育の果たした役割も大きい。

キリスト教の理念に基づいた学校も多く創設された。キリスト教の学校教育は一般の人々にも広く知られるようになった。日本カトリック学校連合会とキリスト教学校教育同盟のホームページによると、現在キリスト教系の教育機関は全部で570を超えそのうち短大を含む大学は百以上である。しかもその学生のほとんどはキリスト教の信者ではない。総務省の宗教年鑑によれば、日本における キリスト教信者数は約19万人で総人口比の1.5%に過ぎない。キリスト教信者ではない 学生でも学生生活をとおしてキリスト教思想を学ぶ機会が与えられる。そのような機会を通して彼らは表面的であったとしても、キリスト教の一神教としての神を理解するのである。

さらにキリスト教文学も一般の人々に多大なキリスト教理解を与えた。キリスト教をテーマにした小説は非常に多くの人に読まれ、また、多くの小説が書かれ発行されている。クリスチャンの小説家のみならず一般の小説家もキリスト教をテーマとして取り上げ多くの小説を書き多くの人に読まれている。このようにキリスト教が啓蒙されそして神の概念も啓蒙されたのである。

キリスト教信者ではなくてもキリスト教に興味を持ちキリスト教とは何かを知るために聖書を買い求める。事実日本では信者の数の割りに聖書が多く訳されまた発行されている。日本聖書協会のホームページによれば年間30万冊以上の聖書が領布されている。部数だけでなく聖書の出版社も多い。通常、聖書はキリスト教の機関が発行するが、日本ではキリスト教関連以外の出版社も聖書を翻訳し出版している。したがって聖書の翻訳もさまざまな解釈がほどこされて出版されている。このことからも一般の人々がいかに聖書に、またキリスト教に興味を抱き、聖書を通して一神教の神を理解しようとしていることがわかる。

以上、これまでどのようにしてキリスト教の一神教を理解してきたかを見てきた。日本人は神道のカミを捨てることなくカミという言葉にさらに神を加えたということである。多神教の神様のひとつが一神教の神であるということであろう。超越の神と現世的神、一神教と多神教の神がひとつの同じことばのなかに同居で

きるのはこのような経緯があったからである。そしてさらに神道のもつ包括的世界観がその土台にある。

3.神道と日本人の包括的世界観

神道の世界観は包括的な世界観である。神道は日本の土着の信仰形態であり、日本人の生活と切り離すことができない。丸山真男はこの世界観を「無限抱擁」ということばを使ってあらわしている（丸山，2009：14）。そしてその無限抱擁は神道の性格であり、この性格の由来は絶対者が存在してないからだと述べている（丸山，2009：20－21）。さらに、丸山によれば抱擁されたものは交わることなく同じ空間に同時に存在しているのである（丸山， 2009，p 64）。外から導入された新しい概念は抑圧されることなく、また、対決することなく単に空間的に同居しているのである。すなわち日本には何でもあるということであり、これが神道である（柄谷,2008）。これはまさに神道の性格であり、キリスト教の神であれ神道の神々であれ、お互いに交わることなく、ただ、同時に存在しているのである。これが神道の包括性、丸山の言うところの『無限抱擁』である。神道はこのようにしてその時代時代において有力な宗教と包括、習合してきたのである。したがって神道の無限抱擁、本論で言う包括的世界観は日本人の特徴的な世界観である。

まとめ

神道は八百万の神ということばに代表されるように包括的な世界観を持って発達してきた信仰である。自然の中に神を見出し、後には天皇を神とし、また、人間を神として祀りさらには忌むべきものまでを神としてきた。さらに外来宗教との出会いは神道の発展と変容に大切な役割を担った。神道は昔からあるそのままの状態で今あるのではない。時と共に変容してきたのである。その変容を促したもののひとつが諸外国の宗教との出会いである。日本人は新しい宗教と出会っても自分たちの昔からある神道を捨てることはしなかった。日本人は新しいものと出会ったとき、それを自分たちの古くからある神道の世界観に基づく形で受け入れ、そして育んできた。他の宗教との習合は神道の発展変容に中心的役割を果たしてきたといえる。これは神道が包括的であるがゆえに可能になったことである。日本人の生活のすべての物事、たとえそれが矛盾するものであっても矛盾するという意識をも持たず、善いものであっても悪いものであってもすべてを包み込むのが神道の世界観である。一神教であるキリスト教の神も今では日本に定着している。これはクリスチャンの努力によるところが大であるが、それにもまして日本人の心に深く根付いた包括的世界観を持つ神道の土壌があったればこそである。それゆえ神ということばの中にキリスト教の神も神道の神も無批判に同居できるのである。

参考文献

文化庁. (2013). 宗教年鑑平成24年版. 株式会社ぎょうせい.

キリスト教学校教育同盟(2015). 閲覧日2015年3月17日http://www.k-doumei.or.jp/

林兼明(2000).『神に関する古語の研究』冨山房インターナショナル.

柄谷行人(2008). 日本精神分析再考. 閲覧日2015年3月30日http://www.kojinkaratani.com/jp/essay/post-67.html

倉野憲司. (1940).『古事記伝1』本居宣長選 岩波書店.

白水社中国語辞典. (2015). 閲覧日2015年3月7日http://cjjc.weblio.jp/content/%E7%A5%9E

栗山義久. (2000).「天道遡原にみるキリスト教思想と儒教思想の融合」. 南山大学

閲覧日2015年3月1日http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/bulletin/kiyo7/kiyou11.htm

丸山真男. (1961).『日本の思想』 岩波書店.

三橋健. (2010).『神道の本』西東社.

宮田登. (1985).「神観念」 小野泰博編 『日本宗教事典. 弘文堂.

日本聖書協会. (2015). 閲覧日2015年3月18日http://www.bible.or.jp/soc/soc15.html

日本カトリック学校連合会. (1979). 閲覧日2015年3月18日http://www.catholicschools.jp/member/schools.php

総務省統計局. (2015). 閲覧日2015年3月18日http://www.stat.go.jp/data/nihon/g0302.htm

下出積與. (1979).「神祇信仰と道教 儒教--日本古代思想史の再検討『駿台史学』明治大学. 46(2), 1-20.

山折哲雄. (2007).『近代日本人の宗教意識』岩波書店.

柳父章. (2001).『「ゴッド」は神か上帝か』岩波書店.

Neill, S. C. (1987). Christianity in Asia. In *The Encyclopedia of Religion*. Editor in chief, MirceaEliade. pp.418-423.

Ueda, K. (2000). *Matsubi no Kami and MotooriNorinaga's Theology*. Institute for Japanese Culture and Classics, Kokugakuin University. Retrieved March 1, 2015, from http://www2.kokugakuin.ac.jp/ijcc/wp/cpjr/kami/ueda.html

Translated Japanese References

Agency for Cultural Affairs. (2013). *Yearbook of religion 2014 Edition*. Tokyo: Gyosei Company. [in Japan]

Alliance of Christianity Schools. (2015). Retrieved March 17, 2015, from http://www.k-doumei.or.jp/ [in Japan]

Hayashi, K. (2000). *A study of archaic words relates to the name of god*. Tokyo: Fuzanbo International. [in Japan]

Karatani, K. (2008). *Reconsideration on Psychoanalysis of Japan*. Retrieved March 30, 2015, from http://www.kojinkaratani.com/jp/essay/post-67.html [in Japan]

Kurano, K. (1940) . *Kojiki den(1),* Tokyo: Iwanamishoten. [in Japan]

Kuriyama, Y. (2000). Fusion of Christianity and Confucianism in the book of Tendo Sogen. Retrieved March 1, 2015, from http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/bulletin/kiyo7/kiyou11.htm [in Japan]

Maruyama, M. (1961). *On Japanese Thoughts*. Tokyo: Iwanamishoten. [in Japan]

Mitsuhashi, K. (2010). *Book of Shinto*. Tokyo: Seito Company. [in Japan]

Miyata, N. (1985). *Idea of God*. In Yasuhiro Ono et al. (Ed.). *Nihon ShukyoJiten.* Tokyo: Kobundo Company. [in Japan]

Japan Bible Society. (2015). Retrieved March 18, 2015, from http://www.bible.or.jp/soc/soc15.html [in Japan]

Federation of Catholic Schools in Japan. (2015). Retrieved March 17, 2015, from http://www.catholicschools.jp/member/schools.php [in Japan]

Dr. Hideo Maruyama received PhD in religious study with specialization on translation of religious language from Assumption University, Bangkok, Thailand. He also earned MA in general linguistics from Sophia University, Tokyo, Japan, and applied linguistics from Macquarie University, Sydney, Australia. His research interest focuses on language and culture through the religious perspectives. He constantly gives lecture on 'Translational Problems from Cross Cultures' and 'The Second Language Acquisition from Phonetics and Phonology'. Dr Hideo Maruyama currently serves as a full-time lecturer at Panyapiwat Institute of Management, Nonthaburi, Thailand.